我 如

舌 弥

司

君

作

Ш

今ぞ吾等が誠を奮い高唱いて進まん青き旅路をいました。 まこと よる うた しましん 青き たびじ 危急の時代にあればこそ渦巻く疾風吾が勇を呼び怒涛は汝れ きゅう とき とこう な 吹きゆく原始の森に吾れ微睡みて酒宴し て逍遥 すれども其 に義を求む の歩は 止ゃ まず

斗星と大志の結ぶ 染まず彷徨う其が白羽に 玉黍を食む旅鳥 は に 昂々美稲超えて

花は

灼々壌撃つ酔

Ÿ を

君影草の鈴音にきく

さればこの

)手を春陽高く

に萠ゆ白花に誇らん て情熱をうち燃やし

嗚呼黎明に吹雪も霧地弦を矜持と爪弾けば弦を矜持と爪弾けば 無明むみょう 氷 嵐ん 雪は皚々大地軋めてゆきがいがいだい ちきし の曠野に巨熊眠 に吹雪も霧散す

梢ょうそう 己が混濁をうつし見て 水面に透くきみが底に 孤月仰ぐ子よ誰が為に泣くっき きょこ こ た ため な 月は朧々輝光は幽かっきょうらうきょう 分けて河に落つ

まさに街を呑む るも

> 讃た え 芝く宙を草は 有情の声に朋友和す寮歌を は悠々逍遥 て天宙 るはただ青き旅路ぞ を枕に星を抱 Bを見仰げ、 遥 の果て ば